

紀 要

第 23 号

2010.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

【小特集】普及・活用・体験学習の「現場」から（2）

「広げる」ための文化財活用事業の必要性と課題

—いま必要な努力は何か？—

瀬 口 眞 司

1. 本稿の目的

本稿を執筆している2009年の日本の経済状況は芳しくない。将来への借金を増やしながらでも、目の前にある危機を乗り越えようと、歯を食いしばっている時代である。

そのような社会状況では、一見効果が小さいように見える事業の命運もまた頼りなくなりがちだ。2009年とは、その現実を目の当たりにした年だったと言えるだろう。

本稿の目的は、このような逆境の中、文化財の保護・活用事業を進める上で必要な努力について考える点にある。

2. いま必要な努力は何か？

文化・文化財の意味と活用の目的 最初に、ここで議論しようとしている文化財とこれに関連する文化の意味について私なりに整理したい。

結論から言えば、文化とは「適応する力」であり、文化財とはそのために蓄積されてきた道具や工夫の痕跡である。その道具や痕跡は、過去のみのもではなく、学び活用することで、今に生き、明日に生きる財産となる。故に保護するだけでなく活用していくべき財産と謳い得る。

例えば、悲しみや苦しみ、本能的な欲求に対して身体的な対処法だけで応じることを「野蛮」という。人は、これに理性や知恵、技術といった工夫を加え、適応の幅を広げてきた。生の喜びをあらわし、不条理や死への恐怖などに適応するため、芸術や宗教という「文化」が育まれた。また、例えば自然や環境の変化やリスクに適応するため、技術や工夫という「文化」を蓄積してきたのである。

この「文化=適応する力」をいまに伝え、明日に伝えるものが、美術工芸・天然記念物・遺跡・遺構・遺物などと呼ばれるもので、これが「文化財」の正体である。意識の有無にかかわらず、人類はこの財産を活用し、次の基盤とすることで「適応する力」の拡大という発展を遂げてきた。私たちは初めからここにいるのではない。「文化」をゆりかごとし、「文化」に育まれてここにいる。その原理は未来も変わらない。私たちはその事実と真摯に向き合うことで、さらに社会の維持・展開を期待することができるだろう。ここに文化財の活用の目的があり、だからこそ文化と文化財は保護され、活用されていくべきものなのである。

自省—従来の文化財活用事業の問題点 以上の意味と目的を踏まえつつ、私は財団法人滋賀県文化財保護協会に籍を置いている。

2009年度、私が在籍したのは調査普及課と呼ばれるセクションである。このセクションは主として二つの業務を担

う。一つは現地調査終了後の資料を整理し、発掘調査報告書を製作・刊行する業務、いま一つは資料の普及・活用事業—本稿でいう文化財活用事業—である。課長以下5名の職員と30数名のアシスタント（調査補助員）でこれら二つの業務に取り組んでいる。

2009年度の主な活用事業は、①講座関係、②刊行物関係、③展示・イベント関係に大別できる。このうち①では、毎月1回の連続講座のほか、講演会や発掘調査報告書刊行後の成果報告会などを開催し、のべ179回、のべ約2万人の参加を頂いた（2010年1月末日現在）。

また、②では当協会のPR誌のほか、例えば産経新聞滋賀版に連載していた『びわこの考湖学』の第I部をとりまとめて書籍化し、好評を博しながら頒布を続けている。

③では、例えば毎年夏休みに恒例的に実施している『レトロ・レトロ』の展覧会などを開催した。この展覧会は、前年度に発掘した資料の速報展で、当協会が本部を置く滋賀県埋蔵文化財センターの一階ロビーで、小中学校の夏休みにあわせて実施しているものである。従来の入館者数は4,000人前後だったが、今年度は1,000人増を目指し、外部から会場への導線に工夫を凝らした結果、5,000名の入館を達成することができた。

今年度の私は、主に①を主に担当しつつ、②・③にも責任と関わりを持ちながら業務に取り組み、お越し下さり、お買い求め下さったお客様から、励ましやお叱りの言葉をたくさん頂くことができた。忙しさの中に深い充実感を味わうことができ、大きな財産を得たところである。

ただし、同時に大きな問題点も見出すことになった。そのきっかけは若い同僚の提言である。その提言の要点は、「現在の文化財活用事業の多くは、既に興味を持って下さった方々への還元だけで満足してしまっているかも知れない。いつも来て下さるお客様への『浸透』は効果的に進められているが、裾野をより拡大させていく『普及』には到達できていない可能性がある」という点にあった。

この提言は、私が考えていた活用事業に盲点があることを的確に射貫くものだった。

活用事業の大別2類型—「深める」と「広げる」 彼の発言を踏まえて考えを進めると、文化財の活用事業には大別して二つの類型が設けられることに改めて気付く。

一つは「深める」ための活用事業であり、いま一つは「広げる」ための活用事業である。この二つは、「来て下さるのを待つ」事業と「こちらから出向いて触れていただく入口を増やす」事業として対比させても良い。

このうち「深める」ための活用事業とは、既に興味をお持ちの方々への還元である。例えば、私が担当した講座・講演会などは良い例だろう。既に何かの「契機」で、文化財をお好きになられたり、興味をお持ちの方はたくさんおられる。この方々が、興味や理解を深めるためにわざわざ来て下さることで成り立つ活用事業である。展示をはじめとする博物館事業の多くも、これに該当するかも知れない。

一方、「広げる」ための活用事業とは、全く興味をお持ちでない方々に文化財の存在と魅力を紹介し、「契機」を新たに作り出す事業である。仕事柄、私の周りには文化財の魅力をご存じの方が多く。しかし、一歩その枠からはみ出るとどうだろう。世の中には、「文化財」に興味のない方のほうが多いかも知れない。また、「文化財」という言葉さえご存じない方もたくさんおられるだろう。

このような「文化財」に興味をお持ちでない方が、博物館や講座に来られることはまずない。「広げる」ための活用事業とは、このような方々に文化財の存在と魅力を紹介し、「契機」を作りつつ裾野を広げていく事業である。

いま必要な努力は何か？—裾野の拡大 今後の行政サービスの方向性は、受益者負担に傾きつつある。2009年の流行語の一つは、国家予算配分の見直し——「事業仕分け」だった。この政策が持つ意味の一つは、受益者の少ない事業に予算をまわさない点にあるかも知れない。このような社会状況の中、これまでどおり、あるいはこれまで以上に文化財を日本国民や世界市民の暮らしに可能な限り役立てていこうとするならば、保護行政の前線にいる我々はどんな努力を加えていくべきだろうか？

その解答の一つは、健全かつ意味ある形でより多くの方に受益者になっていただくこと、裾野をいっそう広げていく必要性を今まで以上に明確に意識し、実践することだ。若い同僚が私に指摘したのは、この裾野の拡大が、今後の私たちにとって必要不可欠な努力だということに他ならない。くどいようだが、この努力は、文化財とその保護の前線にいる私たちの生命線になるだろう。

次に、「広げる」ための具体的な試験例を示してみたい。

3. 「広げる」ための文化財活用事業の実践

「広げる」ための活用事業として私達が試みた事業に、大型ショッピングモールでの展示解説・体験学習等がある。以下、その具体的な試験例について整理してみよう。

実施箇所は、滋賀県草津市にある「イオンモール草津」である。このモールは前年の2008年11月に新設された大型店舗で、西日本最大級のモールである。休日の来店者数はしばしば60,000人を越える。私たちは、本稿執筆までに2回のイベントをここで実施し、年度末に3回目のイベントを計画している。各回の概要は以下のとおりである。

第1回は8月15日（土）に実施した。内容は①「蠟石を使った勾玉制作体験」と②簡易展示解説である。①は午前1

回、午後2回の計3回に分け、当日受けの各回定員30名で実施したが、各回とも速やかに満員御礼となった。②は移動式の簡易展示ケースに県内出土の装身具類約70点を展示し、行き交う買い物客に声掛けと解説を行うものだった。結果、6時間30分でのべ800の方に説明することができた。参考までに示すと、当日の滋賀県立安土城考古博物館の入館者数は約300名強だった。

第2回は11月3日文化の日に実施した。内容は①地元草津市に所在する草津川関連遺跡等の発掘調査成果報告会（講演会）と、②それにまつわる出土品約90点の簡易展示解説である。①の参加者は30人と少なかった。場の性格上、講演会の開催は不向きかも知れない。その一方で、②は行き交う買い物客約600人に実施することができた。

これらの2回の試みで体感したのは、まさに「契機」の新たな掘り起こしだった。普段、自分から博物館等に行くことはない方—特に若い世代に、多くの新鮮な驚きと共感を得ていただいたことは大きな財産となった。

なお、第3回は2010年3月20日（土）～22日春分の日に実施する予定で、「縄文アート」と題し、琵琶湖周辺の縄文人の知恵と工夫—「文化」—に親しんでいただく予定である。3日連続とする理由は、簡易展示といえども1日で終わらさずには費用対効果から見て惜しいからである。3日間、3,000の方に触れていただく試みとしたい。

4. 今後の課題は何か？

今後の課題は大きく分けて二つある。一つは「広げる」ための入口を増やすことである。県内諸企業とのタイアップは重要な意味を持つだろう。今年度の担当者間での議論を踏まえるならば、出来れば地域貢献としての共同作業にまで位置づけられていければ、なお良いように思われる。

さらに重要な課題は、「深める」ための活用事業へ繋げていくことである。これが出来なければ、「広げる」ための活用事業も、自己満足に終わりがかねない。折角掘り起こせた新たな「契機」をいかに意味深い縁にしていけるか。買い物に来られるお客様にとって、我々の用意した展示と解説は偶然の存在に過ぎない。この「偶然」をいかに建設的に「必然」に変換できるか。どう繋げていけるか。この点も併せて工夫していくことが、文化財保護のさらなる大きなうねりを生み出す重要な鍵になると私は考える。

【謝辞】 気づきと力を与えて下さった課長・課員ならびにスタッフに感謝しています。特に若手の同僚として文中でも登場した堀真人さんの柔軟な発想とあふれる熱意に敬意を表し、多大なお力添えを下さったイオンモール草津さま、担当して下さった藤珠代様に深く謝意を申し上げます。

（せぐち しんじ：調査普及課 主任）